

「光徳寺善隣館だより」—春号—

発行人 社会福祉法人 光徳寺善隣館
理事長 佐伯 祐善

新園舎に移った子どもたちも進級・卒業の季節を迎えます

昨年は、「竣工式」並びに「なかつマルシェ」にご出席賜り皆様には、大変お世話になりました。新園舎に移りまして早1年が経とうとしております。

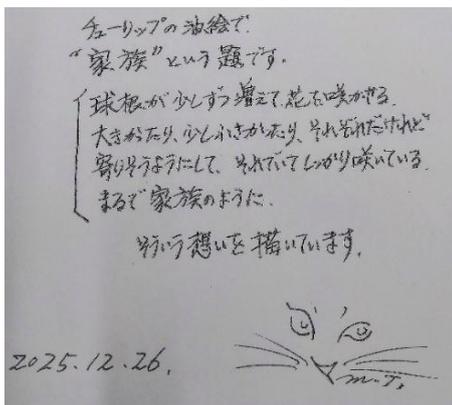
今春には、小学生から中学生、中学生から高校生へと進級する子たち。

また、寂しいような嬉しいような中津学園からは、4名の巣立ちの春を迎えます。

社会に出てゆく準備もそれぞれのペースに合わせながら「自立」という不安と夢と希望に向かう彼らに祝福のエールで見送りたいと思います。

■ 昨年の「なかつマルシェ」では、卒業生や保護者の方々が中津学園に集い、元気な顔を見せてくれたように、彼らにも「いつでもふるさと（中津）へ帰っておいで」という気持ちでいっぱいです。今後も子どもたちの成長とともに中津学園へのご声援のほど、何卒よろしく願いいたします！！

新園舎に素敵な絵画が届いています！



祐正の孫である画家・多田真理氏直筆の手紙より



<家 族>
多田 真理氏作



<おしくらまんじゅう>
加賀まゆみ氏作
フクロウが寄り添う暖かい絵画も
正面玄関口に飾っています

《お知らせ》

「光徳寺善隣館だより」のご愛読ありがとうございました！

皆様のご支援、ご協力のもと新園舎が完成しまして、子どもたちも落ち着いて楽しく学園生活を送らせていただいております。

令和6年3月から新園舎の建替え工事進捗状況の写真や子どもたちの様子などを「光徳寺善隣館だより」で発行発信してまいりましたが、(年間4回四季に合わせて発行) 今後につきましては、中津学園のホームページ、Facebook、インスタグラムで学園の記事やイベント紹介等をアップされますので是非、ご覧いただければ幸いです。

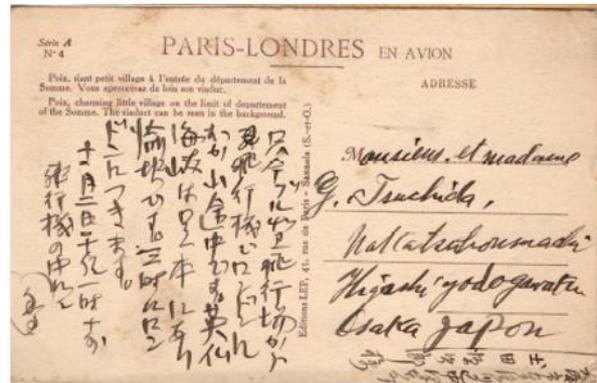
これをもちまして一旦終刊号とさせていただきます。
短い間でしたが、ご愛読ありがとうございました。

コラム

祐正のヨーロッパからの絵葉書より

大阪府豊中市にお住いの三浦路さんが保存されている祐正・祐三の遺品を昨夏に、大阪大学の橋爪節也教授のご仲介で遺品の撮影にお伺いいたしました。路さんは、祐正の姉（長女）の文榮さんの孫に当たられます。お父様の杉邸房雄さんは、よく祐三のスケッチにお供していました。ときには、風に飛ばされたイーゼルや画布を追いかけて、拾いに走ったエピソードが残っています。ご紹介する絵葉書は、祐正がいよいよセツルメント発祥の地である、イギリスロンドンのトインビーホールへ勉強しに行くためにパリからロンドン行の飛行機に搭乗します。その機上から、姉（三女）の嫁ぎ先の土田家宛に書いた絵葉書です。

只今ブルジェ飛行場から
飛行機でロンドンに
むかふ途中です。英仏
海峡は足本にあり
愉快です。三時にロ
ンドンにつきます。
十一月二日午後一時十分
飛行機の中にて
祐正



この記述によって、1925年11月2日に祐正がロンドンへ行くのに飛行機に搭乗したことがわかりました。また、パリ～ロンドンの飛行時間は、2時間ほどだったことがわかりました。

祐正が、乗った飛行機は、これだ！

ライト兄弟が人類初の動力飛行に成功したのは1903年12月です。そのわずか、16年後に、民間による営業旅客機が、就航しています。

第一次世界大戦後の1919年の欧州から旅客輸送事業が始まります。軍務から退いた爆撃機や偵察機を改造し、乗客や郵便物などの荷物を運びました。「ファルマン F.60 ゴリアト」機は、初飛行1919年、巡航速度130km/時、乗客12-14名。爆撃機を改造した世界初の密閉されたキャビンを持つ旅客機。同年3月には、パリーブリュッセル間の国際航空便に就役し、5月には旅客を乗せて、ロンドン～パリ間を2時間50分で結び、最初の旅客飛行となりましたが、試験的なものであり不定期便でした。「ゴリアト」は1920年前半の欧州において最も一般的だった旅客機の一つで、フランスの他ベルギーやチェコの航空会社でも使用されていました。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



Farman F.68BN4 Goliath
ファルマン F.60 ゴリアト：

日本では、購入された同型の1機が「アンリ・ファルマン複葉機」などの通称で知られています。

日本人が、日本国内で動力付き飛行機による飛行に初めて成功したのは、1910（明治43）年12月19日の陸軍による飛行演習のことでした。

この時の試験飛行を見ていたのが、石川啄木で「飛行機」という詩を1911（明治44）年に書いています。死後に発表されました。

「飛行機」

石川 啄木 1911.6.27 TOKYO

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。
給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたつた二人の家にあて、
ひとりせつせとリイダアの獨学をする眼の疲れ・・・・・・
見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを

